





肥陽熊本

白鳳觀

湖閣

朽と終む夢をうや

梅の花

引息を穿て

りてて世の中

全

雨名日のみ

人や皆葉上子

全

一は

川一わう

全

歌仙

讃州洋田連中

鼻之や曉波んく相の花

初喜ふ歌を君合と

空清く舟中の草ふ節掛て

滝子新後れ哉月の数も

梅澄孫勤と結く園らん

六具哉メに。狗の楯取

吟龍

不唐

漲谷

甫梅

文角

紫胤

不唐

吟龍

御車ふ惚てうらうらくか後境
雲の岑り拵と紫雲の怒り
乞食小孩と浪を舟人もくせ
右と古きまゝの音板
多きまゝに松も何處も初る月
ふくくも字也教書の本
油角日辛紙也る及び小摺色
破も抜く深し筆道
灯もあゝるまゝめてふの雪
蝶々踏らぬく襟もふり

浦梅 漲谷 紫帆 文角 吟龍 不唐 浦梅 漲谷 吟龍 紫帆

ナ

雪代来うけまはるりかゝる終
まゝて九の推とあすは讀河語
ふまはれまゝに程の亂あう
新しきまゝに掛る樹田の搦
下向もまゝに實みまゝの垢
新あ子まゝに弁の糸に晴るまゝ
大葉の舞限る指子まゝの岐
舞歌歌をゆれも神歌八見可う
二羽衣平さん月の長流

文角 吟龍 浦梅 漲谷 紫帆 不唐 浦梅 漲谷 浦梅

二乃のふらぬ西鳩吹き
文角

いづきう珠踊
紫帆

大急可羨きくろく
甫梅

布引とくきあふ
吟龍

朽くきききき
紫帆

袖の世居り
隈谷

海山と実塚
左搦

徳のりりり
文角

...

...

入集宛書舞の日記藤梅奇のそやうあは
けきんあうり集あきう版の以て母娘
うんちあきうり集あきう版の以て母娘

寄来れやあき梅の花
招雅菴
不唐

半らうりれの巻年き
一株菴
吟龍

別整五ノ五ノ日の次

非婦人深小ぬる
求梅翁
漲谷

十二夜星りあはれ

村雲の雲り
不唐

多々此葉茂疎ゆゑ木葉ノうれ 吟龍

岸や葦ハ嵐の出木 下 限

神代より素歌也方律時を

岸あして葦ハ嵐のそよをそよ

四季

南紀荒川

青松軒

古ハ叶より多々お茂 七 葉 淹 列

庭をよも多々鶴あり夕月雨

鴨啼や移ち雙轆鼓御田

雪ノふも雪平ノ白木ハ雪ノ如

社石凡

歌仙

有感秋曉

多々茂日小か(ま)や掃の一羽飛 鴨谷

あ〜〜ふちる多々く鳴ひ下 左橋

鹿守の真ハ赤木の雁之めて 令

う〜はあ〜月ハあ〜りり 司嗚

砂月あまより冬の足め込 葦江

まの昔後〜をたせ還 執

遊も功あふくをりて生疾人 君

筆丸に〜して遊交糸也 鴉谷

あまのつらみとあまのつらみ

司鳴

あまのつらみとあまのつらみ

朱令

あまのつらみとあまのつらみ

葦江

あまのつらみとあまのつらみ

君里

あまのつらみとあまのつらみ

鳴谷

あまのつらみとあまのつらみ

司鳴

あまのつらみとあまのつらみ

朱令

あまのつらみとあまのつらみ

葦江

あまのつらみとあまのつらみ

君里

あまのつらみとあまのつらみ

鳴谷

あまのつらみとあまのつらみ

司鳴

あまのつらみとあまのつらみ

朱令

あまのつらみとあまのつらみ

葦江

あまのつらみとあまのつらみ

君里

あまのつらみとあまのつらみ

鳴谷

あまのつらみとあまのつらみ

司鳴

あまのつらみとあまのつらみ

朱令

あまのつらみとあまのつらみ

葦江

あまのつらみとあまのつらみ

君里

あまのつらみとあまのつらみ

鳴谷

あまのつらみとあまのつらみ

司鳴

あまのつらみとあまのつらみ

朱令

あまのつらみとあまのつらみ

葦江

あまのつらみとあまのつらみ

君里

あまのつらみとあまのつらみ

鳴谷

あまのつらみとあまのつらみ

司鳴

あまのつらみとあまのつらみ

朱令

あまのつらみとあまのつらみ

葦江

春日八段ちりめ

おの

紫

司鳴

何れもかとも身んころり

朱令

かぬ之非き上り勢り

葦江

綱て支那に居ぬ

君里

鳴りい

鴉谷

甲五ありうぬ

司鳴

挨拶も

法策

船子も

朱令

夏日

昔へい

葦江

宰府

世の

春

雨

君里

苦

雞

雞ハ

葉

葉

司鳴

蝶通の并奉納

雪圍やけりるりもちとまじり 司鳥

昔の

いふやん洋の根も 鴉 鴉谷

ふあり 呼をや卓に枝 鶯 鶯

は鶯谷ま秋故人とわたりぬをせしん

つかりのささうしてまをゆふとまをう

ゆきゆきや将届の物り

ふゆふゆのゆきふゆ

けり業平のゆきゆきゆき 左橋

けり業平のゆきゆきゆき 左橋

けり業平のゆきゆきゆき 左橋

けり業平のゆきゆきゆき 左橋

けり業平のゆきゆきゆき 左橋

けり業平のゆきゆきゆき 左橋

けり業平のゆきゆきゆき 左橋

けり業平のゆきゆきゆき 左橋

けり業平のゆきゆきゆき 左橋

けり業平のゆきゆきゆき 左橋

けり業平のゆきゆきゆき 左橋

けり業平のゆきゆきゆき 左橋

けり業平のゆきゆきゆき 左橋

けり業平のゆきゆきゆき 左橋

けり業平のゆきゆきゆき 左橋

けり業平のゆきゆきゆき 左橋

けり業平のゆきゆきゆき 左橋

けり業平のゆきゆきゆき 左橋

又

吾もお成たりつたまに明の鹿 昆吾

途中

沙鷗亭

藤五れおほくもろ結の美しはく 五樓

一夜其日少宿して

未幾も隣のおまは巨魁のうか

膝力のけりあまひ可大悪の侮を

たぬいれおほくもろ結の美しはく

お榎や正年一もぬはく 網 左橋

迎曾延孝ことこれ八月文才舎孫角

一席を役あてきれたおぼんこの流挽をあら

よーあつて好士擧て二十八人もし

ふとぬく屋のし是共日れ一柳をばてやふ

手後おききよふおあ白ち小柄を扱て一二角

物と調子探へ糸ハ度アツてや

巻中これあきかろくお白もまき弁乃

さあれを花のきつめんきの気よめるあめり換

た二三子

お河門安信春邦公御正介あり

河津筆の流流書年日

文部省の身の内なるもの哉
見よや人おのろやうかたのいれり
おけくさうかたのいれり
御製を人々感するにあり
此世の極も候様身を運ぶを
詮す寸柄を感ありて撰おし侍る

梅三章
あはれいさうとあはれいさうと
あはれいさうとあはれいさうと
あはれいさうとあはれいさうと
あはれいさうとあはれいさうと
あはれいさうとあはれいさうと
あはれいさうとあはれいさうと

梅三章
京よりぬ風を舟ふらり梅の花 梁甫
舟よやと里えりてはまきのむね 尹口
磯をさぐらるゝ宿のんえん 千鯨
余寒
牛をいさむ二月の瓜白
旅泊るり
花の父母と侍り丸藤の如 富天

書真

水鏡やりのあふては川 嵐夫

全

於一舟の又後数日うね 村徑

暮春

二日月をまわく松の尾をうか 富天

重陽

花あゝ乳よ抱くよまの運 尤橋

青樓怨

エケセテ子
ヘメエレエ

水とゆきく雪吹たれ。 月を浮舟よりこぼれ。

絲木の急のむらりやい 夜半の火の今ハトモ。

早急倉の夏もさる 秋夕吹の秋もさる。

狗のワウの尻あゝも 啼きあはれくは独病もあ。

野渡

呼うけしとぬふ人の影の梅

素文

夕行

日の輝き流るるよき終ぬ夕行

雪彦

名月

名有り乃末社披らん秋は國

東籬

春意

籬籬や庭小舟とちりも花一枝

佳曉

石夏

奈はくくや村城吾とぬ中流

挽

矣みも形くは響の葉落凡の音

春真

紐とけて山もさぬく春の音

指月

梅

梅咲や若くしてのめし来実長

四季

雛子老く一春わくし日の原

桃身

夏

海へも浪待男気さりぬか

初秋宛

このついでにのけし平らういふ
物なりと一語と存もわたりしく

このついでに狐つらうり煉の風

挑牙

冬

空へ陣一白くかゝるや背一これ

秋景

加賀紋や嵐の夜の夢此景

嵐雪

煉暑

渺ふ暑有り焦けく煉のそりか

尤馬

歌仙

梶の葉より揖とら加賀の嵐か

呼山

響も秋も登志虫の音

左橋

名月とて新田娘原草ん

魚洞

懐も近きり羽ハ能く用

鉦花

控星のあり舞臺の多うく舞

左橋

一泊の影一牛て送るれ

呼山

眼我責は及るをりき眼鏡

魚洞

毒牛忌一すれおれ

左橋

掛おの賛のふ出も片果報 呼山

存て以後のゆゆぬ 侍 魚洞

後帯あねまよりハゆしかり 左橋

あ事ふ後のまハあしと 呼山

あてハあしゆきぬ 眺乞 魚洞

あハあしゆきぬ 亦て中元 左橋

あると二夜之夜あつぬのしと 鉦花

躍百支 花のしと 魚洞

け子のあしゆきぬとあしゆきぬ 呼山

あしゆきぬとあしゆきぬとあしゆきぬ 左橋

武士列しとあしゆきぬのふ携後 魚洞

片息よりけり子とせり合 呼山

あしゆきぬとあしゆきぬのあしゆきぬ 左橋

あまのあしゆきぬとあしゆきぬ 魚洞

夏中のあしゆきぬとあしゆきぬ 呼山

あしゆきぬとあしゆきぬとあしゆきぬ 左橋

子のあしゆきぬのあしゆきぬとあしゆきぬ 魚洞

日7年二夜初ハ女よりあしゆきぬ

あしゆきぬとあしゆきぬとあしゆきぬ 呼山

あしゆきぬとあしゆきぬとあしゆきぬ 鉦花

賣酒を認むよきて文衣 左橋

風呂をけしけり百姓の風 呼山

大磯の傘てのりく星月夜 魚洞

酒の追ひ新く子柳の夏 左橋

後流の息もつうせぬ鷺又赤 鉦花

こまきあひと作人天竺 呼山

退て家中の音を入歩り 左橋

我身と袴生あゝ 鯨 執筆

歌仙半

水は流己のあつさ成恨う水 秋葉

木もたきうけ之伏の陰 猪柳

けうけふ村と葉の志向されて 葉

迹類は物乃形抄うた 葉

満月の雲より下み流と 葉

すいぬを流る塗おの霧 執筆

千と傘門へ遠入おのあし 柳

剛う侍事う著信やてん

楠を枯す秋後を鈴

葉

ころくをさ雪の日れき

因一柳ぬきれ果報ハ左りのよ

柳

を海よかきい霞み去清お母やけ

引つちか一息ハ落きをりくく入

去実をちうく付合うよう

葉

騎れより皆義政の二義と如

生ぬるる 深ま 苗代

有美の唾くきくハ早しう

柳

葉の拂ふまよの葉の埃

四季

室かこ木葉を移る燕うか

連史

夏うりや 初くハお母おいらり

八月十五夜唐土を

をこ顔く一柳ハ床出芳後の月

室暖や己の春おけて一歌

荷梅齊重人の

能風知まらして

西宮丹頂館

死きくく下陰深一雲つ木

秋房

もよよりそきの初を花の秋

左橋

正月節分

人々甚多ありけり夜大二十日

南都

上巳

嘗て角子や花や本花のり

燗

國々多敷き末も甚かき

七夕

角子や踊ると同士のあまの川

重陽

碎ぬちと天のあまのやまのり

南京

種竹堂十箇

とほあひ

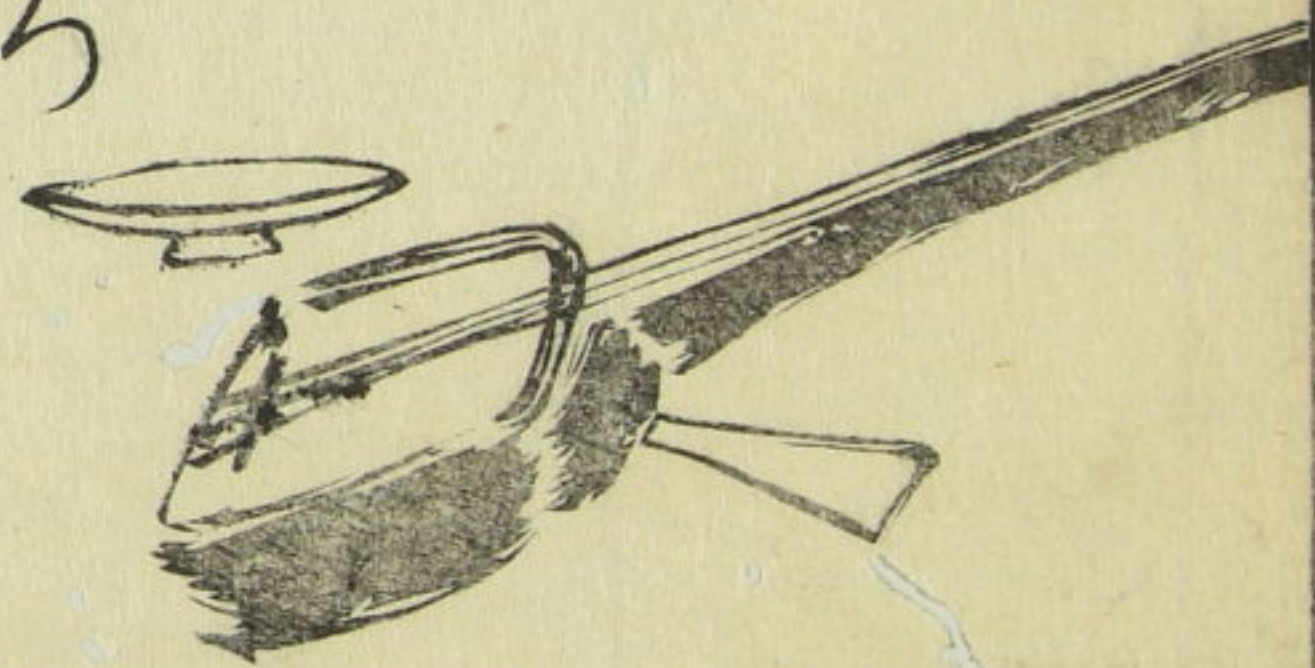
とほあひと代と松の

尾



南京
種竹堂十箇

人
あり



於
満
く
る
ハ

名
目
ハ

四季

全

計百

春のふや宋の聖哉の庭のま
旋花や寧ろるまのま盛る

題角力

禪小靜く玉の光りう那
る仙のまゝてちるやかくや姫

和別はま寺ま寺
名ありおま系さうりり

さけ整の車に飾るはくくか
左橋

夏日

和明味同村

まゝ新らまの錦日れ昂る雲の峰
一水

中秋

硯壽堂連中

海と山とてと見おろは月と都 国厚

全

名月や踏白下戸かゝ嚙出— 文作

全

これ程と見取新珠と茶火うさ 冬松

全

揚の白い満ちり 大を—海 一海

更衣

もよ神吹込め花の飾りかえ 左橋

四季

戸崎

異い時候ぬ哉梅のえん—林卜

滝の画の舞う—れあつ—か

いさゆ—や教を我喚も冬秋

冬浅黄さゆ—見てぬ妙可ぬ

田植

和列俵本村

嘗孫歌有茂穿や植乙女 田長

雨中梅

右口所

去々梅乃付ま—き—ぬ此音 南花堂

秋 暑

雲多—西り小 滂秋の海 左橋

四季

攝昆陽庄

東都花を山の能く採りて其の味を知る

暮夏は涼しく言ふや飛の秋の月 古屑

初夏

雲の白より一羽くくつ移りて雀

とやうものありの歌ふを採る

時ゆくや馬鞍山の秋の色

神冬

涼くも風葉吹ちてわづらふ

端午

尾されより歌を出れ 左橋

重陽

兵庫

綿衣きて老ふ事しる葉の尺 専志

時雨

家ちを雨ぬれぬ 樹をる 叶ぬ

歌竹向人飛

枝伝て咲たり 雪の影をもの

一棹舟来てつれづれと歌れ
さすの相孤村よりて向く
幸哉昔の流水の流小舟山
をいづらんを憶ふ十念の
舟のまきくと結して舟

富士の峯南をぬれぬの 左橋

春

和列三空色

竹樹鼓

峰磨

戯哉皆人ちかり善の條
揚あけて海の清くはけり
山吹や教へるあふそま
臨ちりて座居てゆふはけり

夏

ゆき晴き深きらん
そはほきゆるもかり杜若
ゆくゆくはれあはれ
夕報きり小新く咲小く

秋

秋の山下戸もき戸も
波く風吹てうたてや月小
神樂いと字も
むくくはく硯の水や月の湖

冬

うちあふ似て似たり
雪葉の音お清く
雪の木の叶く
どの牛を一日白く雪め

戲^ニ劔^テ晋陶潜淵明之
所^レ賦^ニ四時之絶句^ニ押
韻^ヲ以^テ為^ス四季發句^ト

紀陽安樂川

吉松軒

淹列

鷹^一化^ス竹^一田^モ 跣^カ
新^ニ民^ヲ表^ス 袵^{ヒト} 綃^一
浮^レ 隕^ヲ 良^一 夜^一 駢^ニ
踞^レ 友^ニ 年^一 忘^レ 醜^カ

あゝ〜卯月の初老を母不従ひ春の遠年
心さ〜先高砂の少くして花衣の袖はは〜ぬ
中山乃城屠〜志那の〜暮老を小拾るあはれ
回月らる日更級嬖控春中より不二もえはれ
己月和の漸高初ふかゆる〜春海を伴坊あ言
をる解〜きり〜道中恙なく帰園〜はるあ乃寸
〜云拾る句〜河〜草穠をば〜哉
水足宗色のをゆ〜送つて二集の遷尾〜
は〜ん〜は〜あ〜は〜う〜あ〜

三十一

留別

抄南大石

公甫

又みれし肉と、解し乳を公兼

茶合の軒の星や茶扱叶
醒る井

時をとりてや醒井の露花
醒る井

庭をくゞりて花の影の跡
鏡井

日や秋とも後をたたりて吾人よ

いそぐぬ結みにあきとくうらみ
やれよ京もさる風とちととて公兼よ

うらみさるる風と水鶏の宿う那
山中

時々ぬ日も清くは枝の結うれ
木葉もさるる人をもさるる

実直れあはるちる人
さうりさるる皆さやせん心とく

道せくふよる路の月毒
文級のあまよハ月のあまよ

横控長んまきや毎ふかいつや

ふあーいぬあぶらあま

紫の深そとちんやま川 龍 公甫

支國橋改く煙

故のまやまふ僧あは二換之

大蔵あま

降しぬゆふ川も深しや、虎う石

清いん寺

又月あや 馬さ城あはれく之保の松

さみまへて押ふあふ不二の煙う那

心宮神前

神風やいそさ糸糸の

まあれて

うはくまのうて

園ちうううう活き管れ月又哉

頌

公甫も生とまの修り 山堂は元
偶りてきたれ越後のやもくううま
信本あはれ掃ふまの音と踏て田分小柳
及らかもむうううううううううう
神徳のこの事さあやうううううう
結しうううううううううううう

雷中み華らんやの 木あはれ不二

左 攝

敦盛塚ゆく婦人袖衣縫致

三江樓

烏を花々麻はく字 昔昔人 猪柳

七夕

日越倦て今宵も星はあやの夜如

傷此無衣客

かろき家城都人ゆれ衣衣たうま 渾焉

貴人城由のく一勝奇り

釣魚の中紗片をゆや ぶらうらうら 秋葉

中秋

しと青紙黄とくあやまき此月 左橋

三章

雨の降れ日とて侍深姫の国の声 且玉

うかつふたなりても梅のにおきうれ

何うよ夢や叶ふの義あらも

は野のいひーニツの女をー
又あり市中のふ家あり
ふ家の市中あり

秀歌をゆく子孫く子孫くま 江淡

上巳

又母よりたゞは経波の枕の花

卯の巻ふ何と隠らんふ柳子

更衣

風の柳哉々々々々々々

至席

苦楚

懐のお乃捨くろ暑さう那

良夜

夕々々や夜の中吹松の風

月乃

飛石の月乃捨くろ暑さう那

七夕

夕夕四生ハ書乞ふ光う那

尤橋

夕夕

管の子ふ乞う書乞ふ光う那

鉦華

喜々

振下降雨や涼くれ書乞ふ光う那

良夜

云々教のり終人と母許達と云々の夜

雲教

云々病いそ書乞ふ光う那

冬金

物々多や室押あけて書乞ふ光う那

尤橋

膏燭

揚光祀の園成流り雲うね

冬嵐

火火日

天地成るて百姓の異さか

蟻岳古曆賀

あまうつれまの肉わうり一ツ去

尤橋

三章

鳴き川とく少ゆまらん箱の雑

春云

的風の雲りぬるに 懐こく申

青き鳥れさるるわこ

如月五日 能大壯亨 順令 竟嘉

探歌之序

難波のま古ぬりてまえりてそくし年あふ
右左の橋あさく花さくは実そのまき白ひ成
保て特と序と飛くまきまきあ梅あゆのま
定り子造るまうりそりあめく大いのか海くみ
耕と水橋りまき色とまきく銀燭は小輝あふ
後魚揺りて水さふ小輝くくまふ雲とゆんそめ
好士許彼作我踏ひ交り佩ひ交り一丸
千重の便をわきけ美保海音あをあ
まらあはれ満具題成提りて一寸の白燭を

しゅわしゅわ

水色飯

梅の香もや野宮の風 溪 鹿 田鶴樹

水色土岐

浪舟の舟くもや拂入川 柳 方兄

水色硯

波濤く滯り梅の硯う都 冬嶺

水色碎雪

加茂川やうらひ寸流風これ足 度秋

水色晚鐘

月夜清く遠くも水一鐘の声 茶氏

執筆

水色夜梅

志ややうふ蕙もや 春まはれ梅の梅 徐来

水色虫焼

春の夜や細雪をい糸登り 岩子

水色明星

市浪やや煙も怒歌星の歌 左橋

香み濡り二月の顔雪や 持 蟻 岳

玉椿

又盗む卵カニコを中のしやくのすち

鳧岨

紅葉

せんかすも換ふみ枝の異さうか

重師

換有玉送りあり

白雪やかか賀の築山はさくらよ

冬

日もすりや波まらりく浦子も

空代石片しうらむくぬる我屋中

先生の撰集代祝しき

備後東城連中

涼しさのけさぬま砂の福うか 全 午睡

鄙まきもまき代破れ草の風 全 金雅

風うけさすや不快の鈴うさ 全 芝風

月花枝葉又鳴きや夏木立 全 可昌

抄より同士の嘆息をまき代草の
あひまきもまき代の一技とあしん

袴着やまきし衣紋のまみり 全 江南

十夜 全

木のあま玉伊のまや 屏 糸 素扇

夏目 全

夏目 富春

季混雜三詠

東城

金雅

春木うかき藤ふきうけし東城の花
計明くさきさきしてけん系さくく
五月西やそのけりふ丁子風呂
價金まけしき山の 個 信水
みおのやう首のつややあみの月

梅の秋子文成きよのち徳し
辞師の之を流す

全

扣く戸のくさきし中もね繋うる

江南

後仰支塵宿速にまて芥室と

叩きかきし長あふ松枝ととまんとおりよ
あわよるれしゆ帆の赴きてのちをこと
おもひて流 霧介押 出に

根茂うきみ風をとりむやと年外

左橋

六月の春の梅ふかきく出の
さきのひらけりしやうけいけ
梅らんちんれんまの梅もさき
味喰うし 梅砂の板もさき

伎後東城

雷やゆりのけ味喰うて梅さきし

江南

何来雅意の致仕をこゝぬれぬゆ
歌小姓命のらか付くそ梅下小星

名介とけて杖より梅の葉の 園

尼城蒼蒼玉入門と祝

昔の流をさる小御多や 厚子 抄 左 橋

中秋

古人の云二十里の外の新ひも
あきらかにとて孝一と成りて

白ハ志ぬ縁やあつたまの月 山奇

寿誕賀

花おほくちかき家老とて七旬の星哉
孝一とて自ら依りて進みゆく
縁は縁も我
ん初は唯妻の形をたし
交順小徳を我い庸才ありして
仍も流ふと我あり
固く三かま辰小一族を招く
甲お程の飲とて
志相負の此れをそあ一のあけらる

左橋

四節

備後東城

春城行むんもあは牡丹か 可昌
卯の花をん氏老あり造ふ松根か
卯丁の下より掛への狐うも
子供ホウオチをんあふあう言ふ

夏日

全

糸雨やかー礼教く小笠原 富春

後園の柳かー小碓はく

納涼の風味はあ熱極 江南

卯の花をん氏老あり造ふ松根か

種景

伎後東城

月歌を多きてあまの歌 素扇

初冬

吹うききき 柳きと釣の時ぬれ

納涼

こいつこまの命を涼し 富春

三章

この神のふしさをせん系梯 可昌

一夢ふき夜を寐そほきき

浮きく鳥書ききき

四季

伎後東城

戴くやう浮きき 妙歌 桃花 午睡

其代持歌やあつきの二日月

隣子あきけはむくやあすれ

あきけきききききき

酒の初句は是の頃の酒の初句にて老翁の歌は
他事なり初年の思ふも初句の二言と定ま
はつての初句は酒の初句の初句なり
初句を付し初句の初句の初句なり
また初句の初句の初句の初句なり
初句の初句の初句の初句なり

右目所

水ぬけの路ハ初句の初句の初句 江南

重陽

聖尺年足終よりの草の花 布谷

全

淀川やうらな重れ葉の水 仙菓

全

あふり新秋珊瑚珠や藤の葉留 茶雪

社頭梅

和泉或部の外ありてむら
小町に伝へて遊みらのくちりせ
とそ名抄にありて今も家よりて

わくさぬい小町らむんを藝一重 左橋

種景

正統景をては光むら

とりの種かそく深つらふの月 方兄

入河のわぬ一落葉とめ

訓添てハ我もの影やあぬ紅葉
姑のまをを遠影や秋サか子

家父うらな終雨をて
奥のみらねまこの神歌一校
こゝろふちをてゆりて

後の名を月を流る 柳 陰
名月ふそまやあのを此 喜 左橋

冬

北里のさぬ
まじしめりてちりし

さし信や柴屋町うらまのふ 方兄

いふの片うらうらけくあやして

山灰賣のふゆふ 同うん 山おろし

老又、言の界作らかひいよ今

碾茶壺のふらうらわのふり雪嵐

縄うらうらう言傳て了長

庭の書目おぼらうらうや煤拂

舞摺のふらうらう花の目教こうま 左橋

ては字方津雲渡序刻唐唐而く
を記以うらうをめて手板款以舞う
脚神徳田ふまー 徳いけうら
あして

蝉も地ふおりておを鳴くうら衣 鶏列

去秋あまふおあえて白き金中
澄きてそらうらう秋啼を端わらう
中く言板お解うらう

生うらうらう言あふらうおあ子うら

暮一宵一刻と侍人の約あれと暮の
夕うらうらうおあうらう初るふの夕うらうら
中うらうらううらうらうの言と説うらう人

うらうらうらうらう 舞ふおあやあうら

日者日

情子の紋ハ年ハくさむさぬ

幼涼

昔も清花の砂糖の流る流る

世も清くけりくさくさ
たそやあやもやこくたつた
おる

傾城の小山を懐いたる山

乞巧奠

遠ぬあまのさきくぬ軍の操 如 左橋

祝賀

奥南部八戸

浪の花 愛もも咲ぬ 白牡丹 樂水

國遠くこゝろもむれ 多晴くぬ 其風

遠をこれ 疎もあつた 牡丹 三舟

左橋史撰集城館一をこの好士と
凡指すべき物と一は不詳の文と母と

穎松亭

杖相いつきあつてハ世の中 掉 雪

若柳齋の句と成修の句と
感嘆のあきり

此取是といふぬさうらけ際の手

四季子

神鏡より東月にあやまき深ふ

其風

ゆか戸のよひうはし一はれ月

三舟

怯乃も深もあくやく付こむし

棹雪

膝押やまも清き世居の塵

薬水

魚豆水

解残ふま一魚乃 渡て哉

其風

その深きく嘆し 取毒

薬水

眺月と多士よりあふ山を水

棹雪

寄草子恋

糸うられぬ髪の深やまのこみ

左橋

細流

苔く深きさみく 夏の花をうか

左橋

苦熱

雲城をよおふ抱きあつ霧の乳

中元

云の紫やまのいと玉を 躍 髪

摺子木の指付おきてる

花の末や波縁木の深ととも

涙雨

春と捨つ時夏の裾のまじり

一陽

山まきし動てきの日ハ白く 尤橘

重陽

我宿乃粟も熟く老の坂

後月

海どりぬや葉の正登十三 秋

其文知常賀

あまのりく奥ハそやぐ様坂

歳言書抄又為歌詠子

原を銀嶺り刺やうくま日 山

歌仙

空言はぬ海や武翁聖桃ひろ 簾光

まきさ成あ申き人をあふ由 尤橘

杉紙の凡六代 其更て 舎鳳

きのふもまきれ古事多し 素風

帆よそく谷くい喜うお岩の月 尤右

踊歌さかろく 清くを弱きあん 五穂

何とぬく頂て形影 簾の角 素花

解可い寂しくさ松風う吹 簾光

娘も合や娘も一人素浪人 素風

あゝおれ川もよもやよのちうら 尤右

射野中一神と百成たきさ立 土来

霧散うらぐり上於中啓 素花

師の像も信さんをもしその入 簾光

死らるゝに 銀のぬん中 素風

大坂乃ちうらうらり伏見所 五穂

頼力あささ妻のわらう女 素花

あささの使を花乃法子 銀 土来

持ふちうらもて終忘まさうらひ 土来

長いものとは脇指の事やうら 素風

よりのやうにおのへー正妻 左右

あはれ苦の燕もあはれ向う猿 土来

誰いけりうらめたのを指子 五穂

あゝうら性圓さ古田の友 柳 簾光

物あうらとをのちうと淋しい 素風

琵琶の音うらむのわら感う堪 左右

斗舞髪まうらあも巻の甲 焼 五穂

妻一本福うら月の塩加減 土来

新酒の酔のさうらうらまうら 簾光

秋のふらふらと成り 晒 向 素花
 宝の箱のふらふらとけ 鴉のちん寺 左右
 床てのふらふらと成り 去つた家尾切 五穂
 心いさ利くすくすの柴舟 土耒
 清見の成りおとしの也やけつ引く 簾光
 来ぬと遊家家の茶付 左右
 たしやうぬとけの羽織の法 素風
 繫拵のるおしき色 素花
 蚊遣火
 枝のふらふらと成り 故やうの羽織家 舎鳳

雲石廣瀬
 小公降
 和風

白梅や
 牧哉
 けり
 後筆



多分中々々々々

清水よりとけを流

雲州布部
家嶋
雲貫



歌仙

曼陀羅より命とくはぬ柳の春耕	西日小若し山寺乃壁尤播	年々の旅籠をまきあはれ路長	玉の古く申世ふ今も甕	露を家より月夜采て灯の露菜	神りく系意足る秋風紫玉	蛸の糸を糸や、鳴る阿丘	阿丘
----------------	-------------	---------------	------------	---------------	-------------	-------------	----

糸拍子ばま紅糸のいよて帯
 東以
 紗南あつて梅浜の毒
 路長
 かろりて裁糸一糸あて育上
 薨
 爰も伽藍地乃者ゆぬ少
 露葉
 朝を月夕アの瘡あつて
 紫玉
 筆の白の追う糸物
 筆杖
 和睦まの府ま除る裂綃
 路長
 類向う浮く判下九
 東以
 所半町と花をれ使弱り
 阿丘
 叶りぬと事一山葵給り
 薨

二
 梅のうらみ浴衣て立日言まき
 筆杖
 庭あく飲んて流糸と探る
 紫玉
 祢の森縁に灯をけ屎ホウの銀
 阿丘
 射干粒一特先う庭
 路長
 か茂川み奴さハハ小鶏のを
 露葉
 と一度の賀あも糸を造るせ
 阿丘
 算ふりゆれ役あまき足の指
 薨
 傾城破戒付く糸言実
 東以
 裾の家籠とぬ糸あまき
 紫玉
 静に糸籠は合の月
 筆杖

山鳥を
 辰定めん
 月と膏
 清光亭
 龜連



雨月

君も出さず雪の戸敲くはあふか
 仙夕

住吉 玉川

此并 紫玉 東以 露菓 路長 阿丘
 至命 重く 紙表をこり
 露菓 路長 阿丘
 先 大小 紙投出
 露菓 路長 阿丘
 源を 海より 罅し 硝子
 露菓 路長 阿丘
 ちり 是より 露の 涼衣 隠し 供
 露菓 路長 阿丘
 へり と 掃き 清く 神家
 露菓 路長 阿丘
 花の 咲ま 化り あり
 露菓 路長 阿丘
 花の 咲ま 化り あり
 露菓 路長 阿丘

壬申

良歌之咄

雲州富田錦城連

照ぬ家にもふらふら男の被ふ 三 杵

猿猴の子も伸月ののち方うか 雪 駢

合粒の粒うんくんや月とく 村 舩

又ぬ書哉きふふりー三ふの控 楚 桃

雲月

つゞ雲く石火矢放を月とて 呼 嵩

三五夜

同廣瀬

名有や葦の舟も建寺 曉 山

起早庵

五月

雲畑よりかた月此あふれ 亀 友

秋唯

睡帯山王

虎起く於山も色作の喜 疎 松

良夜

家嶋

雲と水我り舟きうくと又此夜 壽 舩

富田川の遠く控ひ海交小橋をほく

小藤

雲碑も真ハ 沉くー月言中 和 風

仲繩

雲州母里

有た帆子ー山海地より所々 桃 笙

中秋

籠松子小籠をもちたる月の照路江
名成照夕平 月見あやしく玉兔 笠波

清光

大溪ハ月の人下はこもくれ 春遊舎 象村
蜘蛛灯は甲斐あやしく月の 如泉齋 百壺

冬吟

うさぎ麻の葉成引少はをさか 凹凸舎 阿丘

流連行給る後と驚き又うぬ

流連行給る後と驚き又うぬ 石橋隣 春耕

寄蛙戀

情も思夏の緑帯ク蛙うぬ 西田 義陵

大柵捐て松を子成中々 尤橋

はく成あそぶ取弓取の驕 梅降

京ハ皆漕うたういあそぶ月の川 郷躬

おそろしと新余取よ泳ぐ 菱巷

雲船も修不宝の市乃人 如葉

おとけと繁の似合ふ妙降 左橋

梅降

五七五

雲の葉や眼をの袖一刺の一字 郷躬
 被わし家く千葉約る也 莪陵
 今副ふ妹脊山函子坂川是 如葉
 来ぬを伏ふ来ぬと抱身 菱花
 精進をあらうと居るに墨衣 梅降
 光棍の仕細端しの寮借ん 左橋
 さついで世川流る牛乳麦 莪陵
 獲るの枝直に月乃組板 郷躬
 松のを花と分る乃旁乃海 如葉
 螺吹く居る天窓く 虹 梅降

二

龍神若多ふる多れ一太知識 菱巷
 節日くく小 狐窟よ来ぬ 莪陵
 塵をん昔成るも角少地成干 郷躬
 今うたう磔打んうたう子 如葉
 尺長を罷の帯に撓る舞下 梅降
 まりく小建く町小水橋 菱巷
 画少も多敷くく之乃乃月 左橋
 記念年行と流りさる 郷躬
 山の耳取厚く来く山作ら 如葉
 嫁の如と叫入垣小豆息 梅降

四十五

窓あけくちりくちりと葉漬痕 菘 菘

舞子の涙くちりくちりと 菘 菘

舞と啼は席をきり破り 郷 躬

舞う降とも来いと舞う 如 葉

まゆりやう量の中ふれ舞衣 菘 菘

多丸脱と湯気の立 菱 菘

琉珠の只塵ちりくちり 郷 躬

松敷万草、度くく 春 執 筆

煉園

魁の夢あり 風の鶏 菘 菘

雪後吟

鉛と日の誘 新 明の 世界く 菘

春 雪

吹ぬ日 春 腰の 春く 柳 多 梅 降

秋 景

教了あけ 未 花を 踏や 雄 山

梅

花や せんき 此 研 小 凡の 春 郷 躬

九日

け一日ふた眼ハあり一洒の碎 郷躬

夏日

さけり 夢や涼しき 野の衣 如葉

官夜

ふゆ 朝も踏も 花あけり乃月

梅をみよ

梅枝 詠年 古形 一 梅 露 菱 花

九世戸あり

本母 あり 室も 文珠の 浄古

歌僊

天涼齋

岩 我 裂 咲 や 骨 を や 草 の 花 又 吟

人 上 紅 葉 さ 夢 秋 歸 柏 里

月 の 樓 を ち 友 も 旬 旬 て 関 磨

城 ち 夢 遠 の 足 代 下 口 耳

短 草 あり 猶 子 の ち 刻 助 炭 都 秋

纏 衣 最 も 磨 候 武 測

掬 取 不 捨 人 我 標 衣 紫 下 物

佛 ち 生 れ 大 工 ン ぬ 少 金 波

西くんく川方角あつりの
 又 執筆
 左のよみあきききて付久
 又 吟
 居續乃朝夕京あも居たを
 柏里
 適——取まハ声のふと虫
 関磨
 片——たハ新さく志れの月の人
 武測
 中ぬき洗いさいとちと溝
 下物
 持く香き皆樟根よ奈果りぬ
 口耳
 飛う空を色ははすれと
 都秋
 花の市ふしもよぬ松屋町
 金波
 木の芽むしつてあつる稚子
 武淵

明かりをあきふ出——古 毫
 関磨
 夕大居やつ——競馬者見まよ
 口耳
 早免子と袂の石よまきりぬ
 又 吟
 家内の傍とさくめその茶を
 金波
 押おれと力女乃養老出た
 下物
 浮市ハ空をまき、葉漬の柴
 柏里
 捨くおれ命て刀先キハ抜キ
 都秋
 唐一ワ踏踏は鹿
 関磨
 好里小人間ちあき、秋の空
 武測
 裏小務ハ番椒
 又 吟

日く物さし二階を五々存を記

只耳

茶種原ちうし新町の内

下物

嘗り多成入着流 浮外 於

柏里

け呪も民族本の(不)意

武岡

陽也して下されし(不)刺然

金波

時 獲しごとく(不)刺然

又吟

おぬけは塵り隣りせん花の雲

矩州

早は函を緑をまや白魚

都秋

秋 秋の心し〜(不)刺然

口下

おら〜(不)刺然

口下

箕面山はくむ

海と雲森と横織 虫け声

関磨

冬日郊外おむ

蟹を眼一擢の帯も教う形

水式

桃の海を縁とそく鮎と拾

草の日小舟は穂波の汐一外

駝柳

春真

可ら行くごとく遠入やん免の妻

武淵

雑四糸河原

灯の花小地を碎せし涼

金波

妹真

白露や薄の中れ并きく方晴

人日

雪残る生約なまの帝今都秋

子のりくし帝の七日もを兼う蟻得

偶成

大くくくの室み網漉く柙ふ口耳

帆の孕き母のり兼や保と其樂

月涼と舞乃休む兼川う那冠柙

茶の花や日初ハ落て満の柏里

赤之の中 閑と於方う茶 茶丸改 下物

秋真

風飛んて人を禁りや兼の垣鳥裙

魚塚とつうハ兼 時 左 橋

西海に杖を曳時 腐るる雪ふ

後日 後日 古跡を嘆く

煙のそと 鏡をぬく 塵すくぬ

五彩堂

高浪の音 来るなまじりて

木を 英人を看り 日佛生と云ふ

樹立の存 小生を 佛くも

星夕 吟の 人な

似くも 人涙も 何れ 明馬

時雨 小生を 何れ

偷む 帆の日 御を しく 何れ

四季

肥陽熊本

琴雨亭

湖長

義之流の 市 流 会 あり

梅の花

全

とあつらん せぬ

月 あり

金はよ人の多き

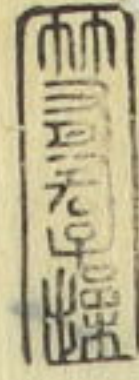
はの月

全

餅汁や潮のころ

ゆり花

全



是日花梅集主人

編纂吉観屏石局社

川来下集子跋を

足物宛てる小詩家

所謂閑気玉

二

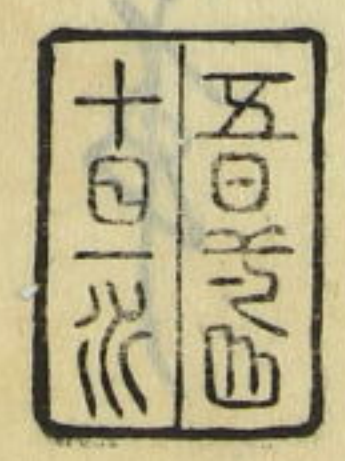
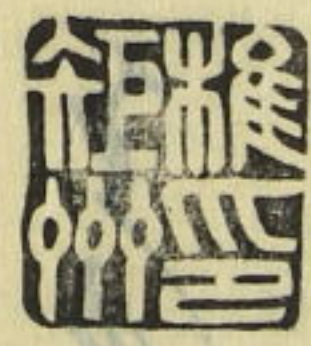
歎く人... 可少... 石と... 有る... 常... 阿... 高...

句... 有... 涼... 富... 武... 病...

紙銷歩る中

しん

王頼推活あは



風

紙のあは

扇子う那

あ



風

花

歌

の

歌中



